

参加費 一、〇〇〇円 懇親会費 七、五〇〇円  
宿泊費 (朝食とも) 四、七〇〇円

二十一日昼食費 一、五〇〇円

日本医史学会関西支部事務局

振替口座番号 大阪一―二七六四五

〒91 堺市新金岡三―一―二―三〇八

長門谷洋治気付 ☎〇七二二―五一一七二六一

### 例会記録

一月例会 平成三年一月二十六日(土)

順天堂大学医学部新館階段教室

一 横浜医学史細見

中西 淳朗

一 巣鴨病院看護長 清水耕一小伝―呉改革をささえた人―

岡田 靖雄

二月例会 平成三年二月二十三日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

一 賈静濤著『中国古代法医学史』の紹介

滝川 巖

一 木簡にみられる「医史学」的記述について

樋口誠太郎

三月例会 平成三年三月二十三日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

一 『ペドネ鑑賞』『A History of Paediatric Surgery

N.T.S.C.』

一 長崎屋の移転

片桐 一男

### 例会抄録

一 シーボルトの娘イネの活動について 高橋みや子  
一 人口受(授) 精論証と脳死臓器移植に就いての私見 宮田十寸穂

長屋王家跡出土木簡に見る

奈良時代貴人の医と食生活への考察

樋口誠太郎

はじめに

平城京跡から多数の木簡が出土し、これにより奈良時代の人びとの生活や職制・官制などの中で従来問題になっていたことがいろいろ判ってきて、出土木簡が貴重な史料として注目されている。奈良国立文化財研究所から刊行される『木簡概報』は、その手がかかりとして各方面から関心をもって見られている。

しかし、これらの内容を「医史学」的視点から整理し見なおしていくという作業は、なされていないので、私はそれをテーマとして検討することにした。

今回テーマとしてとりあげた長屋王は、奈良時代初期の貴人で、政治的にも重要な人物で、その邸宅跡が特定され、そこから約十万点にもおよぶ木簡が出土したことで、当時の最上層ともいえる貴人がどの様な生活をしていたかが判る貴重なもので、「医史学」

的な面からも大変興味のあることがいくつか指摘できる。

一 長屋王について

長屋王は天武天皇の孫にあたり奈良時代前期の人物で、父は高市皇子、母は御名部皇女で天武天皇十三年（六八四）に生まれ、慶雲元年（七〇四）に無位から正四位に叙された「蔭位制」という律令制官人任用規程の最初の適用者でもあった。和銅二年（七〇九）には宮内卿、翌三年式部卿になり従三位に叙せられ養老二年（七一八）には大納言になる。そのバックに藤原不比等の皇族と藤原氏の間で位階昇進の差が目立たないようにとの配慮もあったと思われる。それは養老四年藤原不比等が歿すると長屋王は翌年従二位右大臣となり、養老七年四月には「三世一身の法」を施行し、皇親政治を目ざすことにより律令制維持のため尽力した。しかし天平元年（七二九）漆部造君足らが、長屋王は左道を学び国家を傾けようとしていると訴え、聖武天皇は五衛府の兵で長屋王の邸を囲ませたため長屋王は自尽、妻の吉備内親王も男子四人と共に自殺した、王は四六歳であったという。

二 木簡の発見地

昭和六三年九月に奈良市二条大路南一丁目のデパート建設予定地で、三万点以上の大量の木簡が出土したということが奈良国立文化財研究所から発表された。保存状態は良好で地下の「正倉院文書」とも称される一大発見であった。

ここは約六万平方メートルにも及ぶ広大な敷地に、二百数十層

敷の主殿があり、昨年十二月に出土した木簡に長屋皇宮と書かれていたことから「長屋王邸」ということが確認される。木簡はまだ今後も続々と発見されることであろう。

三 木簡の記述

木簡の中には判読に苦しむものもあるが大体次のようなことが書かれている。

- 1 朱沙 金青 白青 右三
- 2 符、召医許矣進出急々

五月九日家令〔家政を掌握して家扶以下の使用人を監とくする〕

家扶〔家の会計を司とる〕

- 3 都祁氷室二処深各一丈 廻各六丈

取置氷

- 一室三寸 令被草干束

- 一室二寸半 一室五百束

刈廿人

- 功成給布三常ヲ給 米四斗塩一升

一人各五十束

- 戸如須加 二 応 造 斤

- 和銅五年二月一日 火三田次

- 4 医一口 飯一升半 受田部万呂

十月十四日

山万呂

- 5 意期 卅斤（オゴノリ 一斤は一八〇匁）

## ま と め

木簡に記された内容は他の文献に記されているものと対比すると量的にも多くないし、内容もあまりくわしいとは言えない。しかしここに書かれている内容や、信頼性はかなり高いものであると言って良いであろう。

たとえば「天皇」の嫡子にのみ用いる「親王」という用語が「長屋王」にまで及んでいたこと。当時の高貴の人は、犬を飼ったり、鶴を邸内に飼育したり、食生活にしても、かなり自給自足のできる豪華な生活をしてきた様である。

当時の庶民の生活と対比してかなり優雅で薬物や医師のことにしても十分な配慮が払われた中で生活していることが判る。

(平成三年二月例会)

## 横浜医学史細見

中西 淳朗

この七、八年、横浜の医学史を研究して来たが、基本的な課題であるのに、研究されていない問題点がいくつつかあるのに気づき、今回その一部を報告した。

### 一 ヘボン先生に神奈川で日本語を最初に教えた日本人

ヘボンに神奈川で日本語を最初に教えた日本人について、昭和五十二年に『神奈川区誌』編集委員会は、竹口信義のかいた『横浜の記』から本多貞次郎という医師を割り出した。

しかし、貞次郎の人物像が不明瞭でどの様な医師であったかは不明であった。

一方、ヘボン研究の最高峰である高谷道男氏（桜美林大学名誉教授）は、貞次郎はヘボンの下僕でありスパイ、刺客であったと低い評価を下している。以上の落差を、竹口信義から兄の竹川竹斎宛の手紙（文久元年二月三日付）の写を射和文庫所蔵の竹斎「反古帳」から見出し、これでうめることが出来た。

即ち、この手紙によって、貞次郎は京ヌキナ先生（貫名海屋・安永七年〜文久三年、小石元俊、元瑞らと交際のあった漢詩人で養生家と思われる）の門人で、勝利見（すぐる・りけん、増上寺の僧で人相見と「八門遁甲の法」という占術ができる老人）を親としてヘボンの下に入ったことがわかった。

一八六〇年二月十九日のヘボンの日記と、『横浜の記』の貞次郎の記事とは内容がほぼ一致しており、貞次郎がヘボンに神奈川で日本語を最初に教えた日本人だと言える。

しかし、本多貞次郎の家業乃至は本職を医というには少々経歴があやしい。

ヘボンはそれを見抜く力が秀逸で、二カ月半にして貞次郎から日本語を習うことを止め、新たに弥五郎（姓不明）という医師を日本語教師とし、貞次郎は下僕専一となった。

### 二 ニュートンとヒルの検梅事業成績

G・B・ニュートンは、慶応四年四月十二日より吉原町遊廓で明治四年十一月まで検梅を行った。その成績については、今井忠宗氏の「我国検黴駆黴の端緒」（千葉医専誌・大正四年五月）に